

06年サバ類

単位：数量，1000トン、価格，円/kg

年	数					量					消費支出 生(千)				
	漁獲 産地	輸入	輸出 生冷 缶	消費地		在 庫	加工品								
			生	冷	塩干		塩蔵	缶	干	蔵	節				
17	620	515.9	95.1	58.4	2.3	47.5	19.4	4.8	11.4	102.2	27.0	27.9	12.1	1,468	
18	629	536.1	48.4	179.9	1.2	52.7	14.0	4.1	10.2	102.5				1,557	
%	101	104	51	308	52	111	72	84	90	100	###	0	0	0	106

年	価					格					消費支出 生(円)
	産地	輸入	輸出 生冷 缶	消費地		消費支出 生(円)					
			生	冷	塩干		塩蔵				
17	56	275	63	275	327	423	449	528	1,274		
18	62	278	70	289	298	504	515	571	1,374		
%	111	101	111	105	91	119	115	108	108		

漁獲と資源

18年のサバ類(マサバとゴマサバ)の漁獲量は、62.9万トンで前年(62万トン)をやや上回り、依然近年の平均(50万トン)をも上回る漁獲であった。

これは、特に北部太平洋海域での好漁が寄与したものである。

マサバ太平洋系群の資源量は1970年代には470万トン程度、1980年代前半は140万～180万トンで推移したが、1980年代末に加入量の減少と強い漁獲圧により減少し、近年は低い水準にある。産卵親魚量(SSB)は1980年代初期の50万～60万トンから1990年代には4万～13万トンへ低下した。近年は低水準の産卵親魚量から数年おきに豊度の高い年級群(1992、1996、2004年級群)が発生し、産卵親魚量は増加傾向にあるものの依然Blimit(45万トン)を下回っている。

近年は1992年と1996年に少ない産卵親魚量(SSB)から28億尾と43億尾の卓越年級群が発生しており、2004年級群も1992年級群に準ずる水準と考えられている。このように1990年代以降はSSBが低下するなか、高い再生産成功率(RPS=加入尾数/SSB)を示す年がしばしばみられ資源回復の予兆と考えられる。しかし産卵親魚量が低水準であるために再生産成功率が高くても加入尾数は多くない年がみられ(2002年など)、また、加入尾数が多い年は未成魚段階からの多獲のために本格的な資源の回復には至っていない。加入量の増加と安定を図るためには、少しでも産卵親魚量を増加させることが望ましい。現在卓越年級群を保護して資源回復を図るために資源回復計画が実行され、未成魚の獲り控えの努力が行われている。

マサバ対馬暖流系群の資源量は、1973～1989年には100～130万トンで比較的安定していた。1987年の129万トンから1990年の84万トンまで減少した後、増加傾向を示し、1992～1996年には127～164万トンの高い水準に達した。しかし1997年以降、資源は急激に減少し、2000年には43万トンにまで落ち込んだ。その後も、2004年には56万トン、2005年には52万トンと低い水準に留まっている。

近年安定している太平洋系群のゴマサバの資源は1995年、1996年、1999・2000年、2003年以降30万トン以上の値を示した。これらは、1996、1999、2002、2004年級群の加入が比較的良好だったことによる。2004年級群は1996年級群を上回る加入となり、2004年の資源量は44万トンに回復し、2005年も42万トンと推定された。2005年から前進法(0歳は親魚量と加入尾数の関係から)で推定した2006年の資源量は32万トンといわれている。

また東シナ海系群のゴマサバの資源は、1992～2004年に比較的安定して同程度の水準を保っていたが、2005年に増加した。資源水準は高位で、動向は増加と判断される。

産地水揚量と価格(継続漁港)

18年の産地水揚量は、53.6万トンで東北地区での好調な水揚げを反映し引続き前年(51.6万トン)をやや上回った。

価格は、水揚げ増加だったものの、北部太平洋海域でのサイズも大きかったことを反映し62円で前年(56円)をかなり下回った。

海域別漁獲量

本年の海域別漁獲量の特徴は、引続き三陸、常磐で好調であったことで、東シナ海での減少をカバーした格好となった。昨年度東海域で久しぶりにまとまった漁獲がみられたが、本年は更に増加した。

海域別漁獲量

	17年	18年	17年
道東	3.4	12.7	377
三陸	88.3	124.3	141
常磐	195.8	181.2	93
東海	77.1	79.0	102
薩南	30.1	28.2	94
東シ海	113.1	101.1	89
山陰	18.0	22.6	126
その他	3.5	0.8	24
合計	515.9	549.8	107

三陸(単位:1000トン)

月	17年	18年
1	1.1	3.2
2	0.2	0.3
3	0.0	0.1
4	0.0	0.0
5	0.0	0.1
6	0.6	2.6
7	4.6	6.6
8	15.3	16.0
9	24.0	38.2
10	31.0	38.1
11	7.9	12.6
12	3.5	6.3
計	88.3	124.3

MAX H53 69万トン

常磐(単位:1000トン)

月	17年	18年
1	12.1	28.2
2	5.5	9.2
3	26.1	3.1
4	27.9	8.0
5	14.5	16.7
6	19.1	15.9
7	9.3	8.5
8	0.7	2.0
9	9.4	17.8
10	18.7	12.0
11	24.0	31.2
12	28.5	28.7
計	195.8	181.2

MAX H6 14.1万トン

三陸

本年の三陸の漁は、北上期は昨年を若干上回る程度であったが、南下期になってまとまった漁獲になり前年をかなり上回る漁であった。

本年は昨年並みに7月下旬に三陸北部でスルメイカとの混獲でまき網によるサバの初漁が

あり、8月頭からは単一漁獲となり11月にかけてまとまり昨年を更に上回る好漁となった。また本年も7月下旬からまき網によるスルメイカの漁獲が始まったが、杣まで達しなく低調であった。

魚体は、当初から2歳魚(2004年級群)主体であり、3歳魚(2003年級群)の混じりもあり、定置網を含め型の大きいマサバの漁獲も目立った。

また、本年のブリ(イナダ、ワカシ)の漁獲が10月に若干水揚げがみられたのみで、昨年、一昨年には達しなかった。

常 磐

本年は昨年までには達しなかったが越冬サバは比較的好調であった。結局越冬寒サバは48.5千トンで前年(71.6千トン)を下回った。

また、春(5~7月期)の北上期の漁獲も41.1千トンで前年(42.9千トン)並みであった、南下群の漁獲は71.9千トンで前年(71.2千トン)並みの好漁であった。

なお、本年のブリ類(イナダ、ワカシ)の漁獲は12月に集中した格好で年を越してまとまった漁獲がみられた。

魚体は、周年を通じてほぼ2歳魚(2004級群)であった。

東 海

伊豆諸島周辺を主漁場として、主に産卵群を対象とするサバタモ抄い漁業は、54年の17.7万トンをピークに減少しており、近年は1万トン以下の低調な漁獲で操業隻数も往時に比べ大幅に減少している。本年は238隻で隻数も更に減少し、漁獲も2,630トンで近年でも最低の漁獲に終わったが、マサバの漁獲が増えたのが特徴。

18年の漁獲量は、マサバが421トンでやや漁獲があった前年(141トン)を更に上回り翌年に期待を持たせた。ゴマサバは2,209トン(前年3,752トン)でマサバが3倍増、ゴマサバは減少した。

東シナ海(単位:1000トン)

月	17年	18年
1	10.6	12.1
2	6.4	7.1
3	5.8	5.8
4	6.0	2.0
5	4.0	1.5
6	5.1	1.6
7	3.8	2.8
8	6.3	6.6
9	9.7	6.7
10	20.5	20.9
11	21.5	13.9
12	13.4	20.2
計	113.1	101.2

MAX H 8 22.2万トン

山 陰(単位:1000トン)

月	17年	18年
1	3.3	3.6
2	1.3	0.7
3	0.7	0.2
4	0.3	0.2
5	0.1	0.1
6	0.0	0.0
7	0.2	0.1
8	0.4	0.7
9	1.5	0.4
10	4.5	6.3
11	3.4	5.0
12	2.4	5.5
計	18.0	22.6

MAX H 6 14.1万トン

東 シ ナ 海

18年の年明け後の冬漁は前年来の漁を反映しほぼ前年並みの水揚げとなった。しかし夏場の閑漁期の漁が昨年以上に低調で、前年を大幅に下回り、9月以降の秋漁でやや挽回したものの、

結果的には昨年をやや下回る水揚げに終わった。

魚体は、本年も概ね300g以下のギリ、ローソクサバ（1歳魚）が漁獲の主体で約72%であったが、ほぼ前年（71%）並みであったが、本年は10月に450g以上のサバが37%前後じって漁獲されたのが特徴で、他の月でのアソートは低かった。

山 陰

この海域で漁況は、年明け後及びと閑漁期の夏場の漁が昨年下回る低調さであったが、秋漁が前年を大きく上回ったことで、水揚げも前年をかなり上回った。

本年の漁況の経過は、年明け後の漁は春になるに従い低調になり前年をやや下回り、その後の梅雨期に低調に推移した。しかし夏場以降の秋漁は、昨年をかなり上回って推移した。

魚体は、上半期は2004年級群主体に、後半には2005年級群が主体であった。

輸 入

本年の輸入量は、4.8万トンで、前年（9.5万トン）を引続き大幅に下回った。これは主にノルウェーからの搬入減少を反映したものである。本年も搬入のピークは11、12月で例年と変わらなかったが、国内特に三陸での好漁とサイズ組成の良さ、価格の安さもあってことが反映したものである。

主要な輸入国は本年も依然ノルウェーが83%と高いシェアで、ややシェアを高めた。また、それ以外の国でも数量は落としておりカナダ、イギリスが、それぞれ3,204トン（前年6,599トン）、1,325トン（前年6,378トン）、中国が1,026トン（前年1,473トン）、アイルランドが682トン（前年3,485トン）であった。

本年のノルウェーからの輸入原料は600サイズ以下が77%（前年：87%）主体に600UPが23%（前年：13%）で、シェアでは600UPが伸ばし、4-6サイズの減少となっている。また最近では600gUPを始め日本とロシア、中国等諸外国との買値の競合関係が顕著になっている他、本年は、国内サバの好漁もあって輸入サバとの競合が顕著であった。

価格は、278円でほぼ前年（275円）並みであったが、高値オファーでの買いが少なくなったことを反映したものである。

また、中国等海外加工が依然活発にみられ、製品輸入も多いが、本年は10,511トンで前年（9,982トン）をやや上回っているが、伸び率は低くなっているか止まりつつある。

輸 出

本年の輸出量は、18万トンで前年（5.8万トン）の3倍と大幅に増加している。これは北部太平洋、九州、山陰地区等のサバが中国を始め韓国、タイ、エジプト、ガーナ、フィリピン、パプアニューギニア等、アジア・アフリカ・中近東諸国に大きく伸びたことによるものである。しかし、缶詰輸出は1.2千トンと史上最低の水準であった前年（2.3千トン）を更に下回った。

在 庫 量

在庫量は、10.2万トンと前年（10.2万トン）並みであった。

これは、国内生産量の増加と輸入の減少と輸出の増加が相殺した結果である。

消費地入荷量と価格

18年の消費地入荷量（10大都市）は、水揚げの漁獲の割には型の小さいのが多かったことを反映し、生鮮5.3万トンと前年（4.8万トン）を上回った。

また、冷凍は1.4万トン（前年1.9万トン）、塩干4.1千トン（前年4.8千トン）、塩蔵1万トン（前年1.1万トン）と総じて原料・製品とも減少傾向が顕著であった。

価格は、生鮮298円（前年327円）、冷凍504円（前年423円）、塩干515円（前年449円）、塩蔵571円（前年528円）であった。

価格は、輸入原魚価格が上昇した結果、冷凍原料（総菜物原料）、製品である塩蔵（塩フィレーや切り身、塩サバで利用）、塩干が引続き上昇したが、鮮魚が国内の漁模様を反映し下落した。

また、消費地市場、末端のスーパー・量販店では、近年ゴマサバが多かったが、国内漁況を反映し、今年の鮮魚販売ではマサバがゴマサバを凌駕したことが目立ったが、消費支出は金額、数量とも増加した。